

メアリ・シェリーの
『最後のひとり』における政治観

細 川 美 苗

松 山 大 学
言語文化研究 第36巻第1号 (抜刷)
2016年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 36 No. 1 September 2016

メアリ・シェリーの 『最後のひとり』における政治観

細 川 美 苗

1. 序 論

1826年に出版されたメアリ・シェリー (Mary Shelley 1797-1851) の『最後のひとり』 (*The Last Man* 1826) は、21世紀を舞台にした未来小説である。物語の前半では王を廃位した後のイギリスの政治的混乱が描かれ、後半においては世界的な疫病の流行によりあらゆる統治の試みが失敗する様子が描かれている。フランス革命後の当時のイギリスにおいて、歴史の終わりまたは世界の終わりというテーマは非常に流行しており、メアリ・シェリーに先立ちジョージ・ゴードン・バイロン (George Gordon Byron 1788-1824 以降バイロンと表記) が “The Darkness” (1816) を、またトマス・キャンベル (Thomas Campbell 1777-1844) が、まさに “The Last Man” (1823) という詩をすでに発表していた。

メアリ・シェリーは1824年2月から1825年11月にかけて『最後のひとり』を執筆したと言われているが、1820年代前半のイギリスは時代の終わりという感覚を、王権の移行という象徴的な形で受容した時期であった。イギリス国王ジョージ三世は1760年から1820年まで在位しており、良き父、そして夫であり、多くの子を残した伝統的父親像であった。多くの国民は「国王のことを愛すべき父親あるいは祖父であり、彼らが物心ついたときからずっと在位した国王と思っていた。彼が国王で無かった時の事を覚えている者はほとんどいなかった」(キャロリー・エリクソン1-2) のである。ジョージ三世はその治世

の終盤には精神的な混乱を経験し、体力も衰え「影のような存在であるにしろ。依然として国王であり…国民の父であった」（エリクソン 300）。浪費家で多くの愛人を持ち、妻にあらぬ疑いをかけて王妃としての権威を奪おうとし、その存在を蔑ろにしている息子であったジョージ四世への王権移行は、国民にとって歓迎できないものであっただろう。国王ジョージ三世の治世の終盤において国民は、「もし彼が逝去したら、より安全だった古い世界への最後のきずなが壊れてしまうだろう」と感じ、「多くの人々は今や手の届かなくなった過去を追想し、一世代前の時代について語り始めていた。それは彼らが呼ぶ『怨恨と悪意が渦巻く現代』より前の、『本来のイギリスであったとき』だった。年老いた国王は、今は過ぎ去った、新緑におおわれ希望に輝いていた過去の遺物であった」（エリクソン 300-301）。つまり、1820年の国王の交代に関して、一つの時代の終わりという感覚をイギリス国民は強く感じ、より良い時代が過ぎ去ったという喪失感に包まれていたといえる。このような状況において、歴史の終わりや世界の終焉という文学的テーマが流行したのである。

このような時代背景に呼応するように、1822年に夫を亡くし失意の底にあったメアリ・シェリーは、取り残された者という時代のニーズに合ったテーマである『最後のひとり』において、自身のおかれた立場についての比喩的な文学的表現を見出したといえる。しかし、イギリス全体が過ぎ去ってしまった古き良き時代を回顧し、取り残されてしまったという哀感を抱いていたにもかかわらず、彼女の作品は好意的に受け入れられなかった。例えばアン・マクウィール（Ann McWhir）は出版年である1826年早々に、*Monthly Review* が『最後のひとり』を以下のように酷評していることを紹介している。

...There is nothing in the conduct, in the characters, in the incidents, or in the descriptive matter of this work, to which we feel any pleasure in referring. The whole appears to us to be the offspring of a diseased imagination, and of a most polluted taste. We must observe, however, that the powers of composition

displayed in this production, are by no means an ordinary character. They are indeed uncontrolled by any of the rules of good writing ; but they certainly bear the impress of genius, though perverted and spoiled by morbid affection. Mrs. Shelley frequently attempts to give her style a rhythmical [sic] conciseness, and a poetical colouring, which we take to have been the main causes of the bombast that disfigures almost every chapter of this unamiable romance.

The descriptions of the operations of the pestilence are particularly objectionable for their minuteness. It is not a picture which she gives us, but a lecture in anatomy, in which every part of the human frame is laid bare to the eye, in its most putrid state of corruption. In this part of her subject, as indeed in every other, she amplifies beyond all the bounds of moderation. We are reluctantly obliged to pronounce the work a decided failure. (*Monthly Review* 1 (1826) : 333-35, quoted in McWhir 412-23)

…この作品（『最後のひとり』）の中の教訓や登場人物や出来事や描写の中に言及したいと思うようなところは何もない。全体は病んだ想像力の産物であり全く汚らしい趣である。作品で示された創作力は決して並はずれたものではない点は述べておかなければならないけれども、それはいかなる良い書き方の規則によっても抑制されていない。確かに非凡な才能を感じさせるものの、不健全な感情により正道を外れ台無しになってしまっている。シェリー夫人はしばしば表現に韻律的な簡潔さや詩的な効果を取り入れようとするが、それこそがこのとっつきにくい空想小説のほとんど全ての章の美点を損じる主な要因だと思う。

疫病の作用に関する描写は特にその詳細さゆえに不愉快である。それは叙述ではなく、解剖学的講義であり、そこで人体の各部はひどく悪臭を放つ状態で眼前にむき出しでおかれる。彼女はこの話題において、実際その他すべての事についてと同様に、節度の許容範囲を全く踏み越えて誇張し

ている。言いたくはないが、この作品は全くの失敗である。

上記のような不評のひとつの要因は、この小説の描写が説明的で長すぎる点にある。確かに物語は長く、書名がすでに結末を示しているのであるから、話の展開を早めて劇的な物語進行をしたならば、より好意的に評価されたのかもしれない。

また、小説の前半と後半においてテーマの隔たりがあることも、不本意な評価を受ける要因の一つだろう。小説の前半は王を廃位したイギリスの政治的混乱が描かれ、19世紀初頭のイギリスにおける政治に関する言及が多く、作者の政治的な意見を小説化しているとみられる部分である。一方小説後半においては、もはや政治が機能しない社会状況に陥った世界の様子が描かれている。そこでは、主人公を取り巻く人々が疫病を逃れようとドーヴァー海峡を渡り、ヨーロッパを徒歩で南下する旅路が延々と描かれている。アルプスの美しい風景を旅行記のように描写する部分もあれば、そこで死に直面した人々が混乱の中で陥る非現実的な恐怖体験を描く箇所なども散見され、全体的に散漫な印象はぬぐえない。このように小説が描くトピックの多様性が小説の長編化を招き、さらに小説の主眼を不明瞭にし、読者を飽きさせ、時には不快感を与えたのではないかと思う。

上記に示したように、小説中にジャンルやテーマの混交がみられ受容の際に難解さを感じる点に加え、小説は極度に伝記的である。小説に出てくる退位した王の息子エイドリアン (Adrian Winsor) の描き方には、メアリ・シェリーの夫で詩人のパーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley 1792-1822 以降パーシー・シェリーと表記) を、レイモンド (Lord Reymond) には、同様にイギリス人詩人でありシェリー夫妻の友人であったバイロンを読者が想起するような描写となっている。この二人の登場人物を思わせる詩人達は、小説の出版直前に亡くなっている。パーシー・シェリーはイタリアで溺死し、バイロンはギリシアの独立のために戦おうと当地へ向かう途において熱病で命を落と

している。このような状況から、エイドリアンやレイモンドに先立たれ最後のひとりとなってしまった語り手ライオネル・ヴァーニー (Lionel Verney) は、おのずと作者であるメアリ・シェリーと同一視されるような構成である。現代においては、メアリ・シェリーが日記において自身が置かれた状況が『最後のひとり』の主人公のそれと酷似していることを述べていることは広く知られており、そのような伝記的な解釈は妥当であるとみなされ、一般的に受け入れられている。 (“The last man! Yes, I may well describe that solitary being’s feelings, feeling myself as the last relic of a beloved race, my companions, extinct before me …” 最後のひとり！ ええ、私とその孤独な存在が抱く感情を描くのはもっともなことだ。私自身が目の前で息絶えたいという仲間、道連れ最後の遺物のように感じているのだから。(Shelley, *Journal* 476-7: 1824 May 14))

このような伝記的な解釈は、物語につけられた序においても助長されている。ヴァーニーが語り手である『最後のひとり』という物語に付けられた序において、ヴァーニーの物語が1818年にナポリで序の語り手である「私」によって発見されたいきさつが示されている。それは次のようなものである。序の語り手が友人とナポリ湾を渡り行きついたバイアエの海岸で遺跡を見て歩くうちに、クマエの女予言者であるシビラの洞窟へたどり着いた。そこにはいくつもの言語によって何か書かれた木の葉や樹皮が散らばっていた。それはシビラの予言であり、二人は自分たちが解読できる断片を選択して持ち帰った。その後も二人は度々洞窟を訪れて判読できる断片を集め、語り手はそれらの判読に努めていたが、友人は途中で死んでしまう。伴侶の死による悲しみから目をそむける作業として、語り手は持ち帰った断片の解読に一人で励み、それらを一貫した物語の形に再創造したのがヴァーニーの物語となる。

序における伴侶を失った語り手の姿は、小説の作者であるメアリ・シェリーを強く想起させる。序は語り手がバイアエの海岸へたどり着いた経緯は、以下のように記してある。“I visited Naples in the year 1818. On the 8th of December of that year, my companion and I crossed the Bay, to visit the antiquities which are

scattered on the shores of Baiaë...” (*The Last Man* 5) (私は1818年にナポリを訪れました。その年の12月8日に連れと私は、バイアエの海岸に散在している古代の遺物を見るためにその湾を渡りました。…) ここで、メアリ・シェリーの記事を参照すると、1818年12月8日に彼女は夫と共にバイアエ湾を訪れたことが分かる。彼女はその時の様子をこのように記している。“The Bay of Baiaë [sic] is beautiful but we are disappointed by the various places we visit.” (*Journal* 242) (バイアエの湾は美しかったが、私たちは訪問した様々な場所でがっかりさせられた。)

このように、ヴァーニーと序の語り手は、大切な伴侶や友人を失った絶望の中で『最後のひとり』となる語りを生み出しているという点で、メアリ・シェリーと同一視され得る者である。その一方でこの三人の語り手の性別は、ヴァーニーが男性、メアリ・シェリーが女性、そして序の語り手は不詳となっている。序はある程度の長さがあり、この中で性別を特定できる要素が無いという点については、意図的であると考えられるが、その点と物語内容全体に関してこれまであまり論じられていない。物語の中で混在するジャンルやテーマの錯綜と同様、この点もまた、物語を全体として解釈することを困難にしている要素である。『最後のひとり』は、長い物語の中に様々な要素が入り込んでいる複雑な小説であることは間違いない。

上述のように、小説において描かれている要素は多岐にわたっており、当時の社会状況を反映したイギリスにおける統治の試みとその失敗は、小説の一部でしかないが、空想的な歴史の終焉の物語の冒頭におかれた政治性を、当時の政治的な状況に照らし合わせて考察することは、全体的な物語解釈において不可欠であり、またそれを助ける試みであるはずである。このような観点から、本論では『最後のひとり』における政治性のみを焦点を当てて一度整理したいと思う。

2. 君主制と共和制

この小説で読者の目を引く政治的要素の一つは、イギリスにおいて君主制が終わりを告げることであろう。このような政権の交代は、フランス革命の記憶がいまだ消え去らぬ1820年代においては、全く根拠のない想像という訳ではなかったと思われる。それは隣国においてすでに目撃されており、そのフランスでは復古王政の凋落が始まる時期だったことも手伝い、政権の移行に関する小説の内容はある程度現実味のある出来事として受け入れられたのではないか。

小説の主人公であるヴァーニーの父は政界で失脚したため、ヴァーニーはカンバーランドで孤児として育ち、教育も受けぬ山賊として暮らしていた。彼の少年期にイギリスで王の退位があった。それは妹と共に片田舎に住むヴァーニーの耳にも聞こえる変化であった。

I lived far from the busy haunts of men, and the rumour of wars or political changes came worn to a mere sound, to our mountain abodes. England had been the scene of momentous struggles, during my early boyhood. In the year 2073, the last of its kings, the ancient friend of my father, had abdicated in compliance with the gentle force of the remonstrances of his subjects, and a republic was instituted. (19)

私は人里から離れて住んでおり、戦争や政変のうわさはほとんど意味のない騒音として私たちの山の住処に聞こえていました。少年であった頃、イギリスはしばらくの間大きな闘争の場であり、2073年に、私の父の古い友人であった代々続く王家の最後の王が、臣民の抗議と言う穏やかな圧力に従って退位し共和制がされました。

小説に描かれた君主制の廃止は、フランス革命のような暴力的な革命ではなく、王の同意による退位という点で、作者の父親であるウィリアム・ゴドウィン (William Godwin 1756-1836) がその著書『政治的正義』(*Political Justice* 1793) において示したような理性的な社会改革の一側面を示している。その一方で、理性的個人の育成により、個人の自由を妨げる社会制度の消滅を主張したに留まるゴドウィンの理想を超え、イギリスにおける君主制から共和制への移行を描いているのは、より急進的であると考えられる。

しかし、メアリ・シェリーはゴドウィンの思想に全く同調しているという訳ではなさそうである。物語が進むにつれ人類は滅亡に向かうのであり、必然的に過去は人類が繁栄した理想郷として思い描かれることになるからだ。つまり、古き良き失われた時代として君主制の下にあるイギリスが想起されるのだから、小説に描かれる君主制の消滅がすぐさまその急進性と等価となる訳ではないだろう。

小説には、メアリ・シェリーがゴドウィンの思想に批判的なのではないかと考えられる点もある。物語は21世紀を舞台としているにもかかわらず、登場人物たちは全く理性的進歩を成し遂げていないからだ。退位した王の息子で、ウィンザー伯となったエイドリアンをのぞいて、小説中に現れる指導者たちは一様に個人的な事情に動かされて統治をしくじめる者ばかりで、最大幸福の原理に従い個人的な幸福追求を犠牲にする姿は見られない。メアリ・シェリーは、ゴドウィンの考える理性的個人主義の実現という点には懐疑的であったといえる。

小説内で唯一個人的な幸福の追求を退け、疫病の恐怖に戦く民衆を統治しようとするのはエイドリアンである。彼は王位を継ぐ血筋でありながら、共和制を支持していた。温和で聡明なエイドリアンがイギリスを統治するのであると読者は早い段階から期待するが、彼はギリシア大使の娘イヴァドニ・ザイミ (Evadne Zaimi) との仲を母親に引き裂かれたことによって、狂気に陥り身を隠す。このため彼は、疫病が蔓延する以前の健全なイギリスの統治に関わる

ことはできない。彼がイギリスの護国卿の地位に就くのは小説のちょうど中ほどあたりであり、それまで護国卿として統治に携わっていたライランド (Ryland) がロンドンに疫病が蔓延し始めたので田舎へ逃避することを望んだために、エイドリアンにその地位を譲るからである。

身勝手なライランドとは対照的に、王家に生まれながら美德を備え献身的に社会奉仕に尽くすエイドリアンの姿は、理想的な統治者にみえる。

How lovely is devotion! Here was a youth, royally sprung, bred in luxury, by nature averse to the usual struggle of a public life, and now, in time of danger, at a period when to live was the utmost scope of the ambitious, he, the beloved and heroic Adrian, made, in sweet simplicity, an offer to sacrifice himself for the public good. The very idea was generous and noble, ... but, beyond this, his unpretending manner, his entire want of the assumption of a virtue, rendered his act ten times more touching. (198)

献身というのはいかに高貴なものであろうか。王室の血筋に生まれ贅沢に育てられ、生まれながらに世俗的な闘争を嫌悪するこの若者は今、疫病の危険にさらされたこの時代、野心的な者が抱く最大の目的が生き延びることである時において、彼、愛しく勇敢なエイドリアンは、気立てのよい純真さで社会の幸福のために自身を犠牲にすると申し出たのだ。

上記の引用においてエイドリアンの行為は、自身の名誉や権力とは無関係に社会貢献をする自己犠牲として賞賛されている。しかし、引用でも明らかなように、エイドリアンが統治に乗り出した時点では、すでにロンドンにも疫病が広がっており、理想としていた共和制を実現できるような社会ではない。人々がパニック状態に陥らないようにすることがせいぜい護国卿の仕事であり、統治とは言い難い仕事である。前護国卿ライランド同様に富める者は疫病が蔓延す

るロンドンを後にする中、エイドリアンはロンドンに留まり、疫病の感染を恐れず貧者に寄り添い支援するのだが、それは政治というよりはむしろ道徳的な行為に留まるものである。この点において、エイドリアンのモデルとなったとされる夫パーシー・シェリーの政治思想が現実的ではないと暗に批判していると考えられるだろう。

エイドリアンが統治に携わる頃には、君主制の下に序列化される階級社会はすでに疫病の影響で機能しなくなっており、平等な社会は、実に皮肉なことに、疫病によってもたらされていた。下の引用は、疫病の世界的蔓延により貿易が滞ったことから、食糧難に陥ったイギリスで貧富の差が消滅してゆく経緯である。

To give up their [the wealthy of the land] pleasure-grounds to the agriculturist, to diminish sensibly the number of horses kept for the purpose of luxury throughout the country, were means obvious, but unpleasing. Yet, to the honour of the English be it recorded, that, although natural disinclination made them delay awhile, yet when the misery of their fellow-creatures became glaring, an enthusiastic generosity inspired their decrees. The most luxurious were often the first to part with their indulgencies. As is common in communities, a fashion was set. The high-born ladies of the country would have deemed themselves disgraced if they had now enjoyed, what they before called a necessary, the ease of carriage. Chairs, as in olden time, and Indian palanquins were introduced for the infirm ; but else it was nothing singular to see females of rank going on foot to places of fashionable resort. (187)

裕福な者たちが彼らの娯楽のための土地を農業に従事する者へと明け渡し、国中で贅沢な暮らしのために飼育されていた馬の頭数を分別に従って減らさねばならないことは明白であったが気の進まないことでした。しか

し、イギリス人の名誉にかけて記しておかねばなりません、それらのことをするのを少しばかり遅らせたいという自然な感情にもかかわらず、仲間の窮状が目につき始めると、熱狂的な寛大さが彼らの判断を導きました。最も贅沢な暮しをしていた者がその道楽をいち早くやめるということは、よくあることでした。共同体においてありがちなことで、そのような行為が流行となったのです。その土地の高貴な女性たちは、以前は必需品と呼んでいた馬車の快適さを楽しもうものなら、今では体面を失ったと感じたでしょう。かつてのように、興やインド式のかごが衰弱した人のために用いられた。また高い身分のご婦人が社交の場へ徒歩で出かけるのを見るのも、珍しいことではなかった。

この引用では、確かに階級間の貧富の差が減少しているようである。しかし、このような状況をもたらした要因がイギリス人の美德というよりはむしろ流行によるものだと指摘する点は、作者による社会批判となっているのではないだろうか。それは、18世紀後半以来イギリスにおいて流行した感受性という美德やそのような感性を小説化した感傷小説の持つ道徳的ジレンマを浮き彫りにしているからだ。上記の引用に見られるように、裕福なものの善行が流行なのだと示すのは、感受性が持つ美德を戯画化することになる。また、そのような皮肉を読者が見逃す事のないように、それが流行であったと釘を刺してもいる。マークマン (Markman) が指摘するように、18世紀には他人を憐れむという心情が美德と認識され、慈善の時代が幕を空けたのであった。(the eighteenth century witnessed an extraordinary growth in philanthropy: the dawning of an ‘age of charity’ (14)) しかし、そのような感性の流行には、他人の貧困や不幸を見て胸を痛めるという快樂を得るという点で、道徳的にあいまいな部分を含んでいた。感受性の美德が表す行為は、苦境に陥った者にわずかばかりの金銭を与え自己満足を得る一方、社会的弱者を生む社会構造を根本的に変革しようとはしない支配階級の内面なのだ。そのような矛盾を暴露するかのよう、上記の

引用では馬車などを使わず流行にのっとり徒歩で歩み自らの美德を見せつけながらも、その貴婦人の行き先は豪奢な社交場なのである。

表面的には富裕層が貧しいものに向ける慈善の美德を描き、王家に生まれながら共和制を志したエイドリアンが貧しいものに寄り添う姿を描きながらも、エイドリ안의理想は疫病の広まる非現実的な状況においてしか実現できないことを示し、彼の美德が富裕層に呼び起こす慈善行為の道徳的矛盾を描きだすメアリ・シェリーは、小説内に描かれた社会における階級の崩壊を肯定的に示してはいないのではないだろうか。小説内には、作者がイギリスにおける共和制の樹立に否定的であったと読みとれる部分がある。以下は共和制を掲げるライランド (Ryland) の方針に対して、語り手のヴァーニーが示す考えである。

Yet could England indeed her lordly trappings, and be content with the democratic style of America? Were the pride of ancestry, the patrician spirit, the gentle courtesies and refined pursuits, splendid attributes of rank, to be erased among us? We were told that this would not be the case; that we were by nature a poetical people, a nation easily duped by words, ready to array clouds in splendor, and bestow honour on the dust. This spirit we could never lose; and it was to diffuse this concentrated spirit of birth, that the new law was to be brought forward. We were assured that, when the name and title of Englishman was the sole patent of nobility, we should all be noble; that when no man born under English sway, felt another his superior in rank, courtesy and refinement would become the birth-right of all our countrymen. Let not English be so far disgraced, as to have it imagined that it can be without nobles, nature's true nobility, who bear their parent in their mien, who are from their cradle elevated above the rest of their species, because they are better than the rest. Among a race of independent, and generous, and well educated men, in a country where the imagination is empress of men's minds,

there needs be no fear that we should want a perpetual succession of the high-born and lordly. (176-5)

だがイングランドは本当にその素晴らしい礼服を脱ぎ捨て、アメリカ風の平服で満足できるのか。家柄に関する自尊心や貴族的な精神、洗練された礼儀正しい振る舞い、上品な娯楽、上流階級の持つ素晴らしい名声が我々のうちから消し去られてしまうのだろうか。いや、そのような事は起こらないと言われてきた。我々は生来想像力に富んだ国民で容易く言葉に操られ、陰りを輝かしく飾り立て、つまらぬものに名声を与える傾向があるのだと。このような精神が失われることは無いのであり、新しい法が示される場合は、この血筋に関する強烈な特質を広めるためであった。イギリス人であるという肩書と血統のみが唯一高潔さの証であるならば、われわれはみな高貴なものであり、イギリスの支配下にあるものすべてが、身分において他のものに劣るなどと誰も感じないならば、礼儀正しさと洗練された態度は我々の同郷のものすべての生得権となると確信していた。貴族が存在しないイングランドを思い描くほど我が国を辱めないでおこう。自然の摂理が持つ真の高貴さであり、彼らの振る舞いがその特権を雄弁に物語る高貴なものは、他の者たちよりも優れているのだから、揺りかごに眠る頃から彼らの上に置かれている。想像力が人の精神を支配している国家において、独立心旺盛で寛大かつ知性のある住民は、名門や気高さというものが途絶えるなどと恐れる必要はない。

この引用では、アメリカにおけるような民主的な政治に対して、少なくともイギリスに生まれたものにとっては、長く親しまれてきた階級制度に基づく社会の方が好ましいと認め、階級制度をもたない社会に対するイギリスの優位を主張しているように見える。階級社会において育まれる礼儀正しさと洗練といった要素が、それらを持たない粗暴な社会やその中に暮らす民衆よりもイギリス

人を高貴なものとして位置付けると認識し、これを根拠にイギリス人の国家的優位性を求める立場は、帝国主義の拡大を見た19世紀初頭において、多くのイギリス人が共感した考えなのかもしれない。市川はこの引用部分が最も作家の政治的な意見に近いとし、「メアリが急進的な改革など望んでいないということを示しているのではないだろうか」(95)と指摘している。

引用部分において、民主的な社会や共和制がイギリスにおいては好ましいものとはならず、そのような社会制度はイギリス人が誇りとする高貴さを失わせるものであり、人間性の墮落に繋がる(市川96)と考えていることは否定できない。一方で、イギリス人のそのような気質は想像力に富む精神的な傾向に由来するものであると述べている点において、暗にそのような高貴さが実体を持たないと見抜いているともいえないだろうか。つまらぬものに名声を与えるとまで明言しているのだから、イギリス人が高貴であるとみなすものや態度の内実の虚構性を暗に示しているのだとも考えられる。

メアリ・シェリーは既存の階級社会が維持する社会的美德の虚構性を示したうえで、さらにエイドリアンの指導の下に起きた階級社会の崩壊においてさえ、貴族階級が示した美德は偽善であることを描いた。この点からメアリ・シェリーは、小説が表面的に示しているほどには、君主制の下で序列化される階級社会を好意的には考えていないのではないだろうか。彼女は、共和制と君主制の両者を同様に妥当な統治方法とはみなさぬものの、イギリス人作家として作品の受容を鑑みて自国の制度の優位性を謳ったのではないかと思う。夫に先立たれて一人息子を育てる寡婦にとって、作品の売れ行きは大きな気がかりであったはずであり、フランスにおける社会混乱の飛び火を嫌い保守化したイギリスにおいて、政治的混乱を招くような小説は歓迎されない事を考えてのことだといえる。

1814年7月に当時妻帯者であったパーシー・シェリーと大陸へ向けて駆け落ちしたメアリ・シェリー(駆け落ち時はメアリ・ゴドウィン)であったが、急進的な思想を持つ夫とその友人たちとの生活の中で母親となり、さらに夫に

先立たれ息子を一人養育しなければならない状況におかれ、急進的な考え方に距離を置くようになっていた。その一方で君主制の崩壊をあえて描く点では保守的な考え方を強く支持しているようでもなく、ここにメアリ・シェリーの内的な葛藤を見ることができる。政治的には彼女はこれ以後保守化していく。以下が1838年10月21日のメアリ・シェリーのジャーナルである。

[S]ince I lost Shelley I have no wish to ally myself to the Radicals ... they are full of repulsion to me. Violent without any sense of justice ... selfish in the extreme ... talking without knowledge ... rude, envious & insolent ... I wish to have nothing to do with them. (Journal 555)

シェリーが亡くなって以降、私は自身を急進派の思想と結びつけたいという望みは全く持っていません。私は彼らに大きな反感しか抱いていません。急進的な考えは、正義のないこじつけであり、極端に利己的で、知識も持たずに喚き散らし、不作法で嫉妬深く傲慢です。彼らと何のかかわりも無ければよいのにと思います。

上の引用では、メアリ・シェリー自身が夫の死後政治にかかわる考えが変わった事を認識しているとわかる。このような考えに至るまでの過渡期の作家の内面を、『最後のひとり』は示しているのではないだろうか。

3. 帝 国 主 義

本節では帝国主義にかかわる思想をレイモンドの行動を通して考察したい。レイモンドは極端に利己的な人物であり、理念ではなく情熱に動かされる者である。彼は落ちぶれた貴族のただ一人の後継者であり (Lord Raymond was the sole remnant of a noble family. (34)), 自分の出自を誇りに思う一方で零落の身

を苦々しく思い、ギリシア戦争の志願兵となり国民的英雄となるまでに活躍していた。そんなある日、彼は相続により財産を得てイギリスに戻った。以前は落ちぶれて軽蔑されていた自分が、富と栄誉を得たことで周囲が好意的に変化したことを認識し、以降権力を手に入れることを目的として生きるようになる。

Lord Raymond, by some unlooked-for chance, became the possessor of an immense fortune in England, whither he returned, crowned with glory, to receive the meed of honour and distinction before denied to his pretensions ... Power therefore was the aim of all his endeavours; aggrandizement the mark at which he for ever shot. In open ambition or close intrigue, his end was the same ... to attain the first station in his own country. (34-5)

レイモンド卿は思いがけない偶然からイギリスで大きな財産を相続し、以前は彼の自負に反して得ることができなかった名誉と優遇の償いを受けた。…そういう訳で権力こそが彼のあらゆる行動の目標となった。それは、彼が常に目標と定める社会的地位の指標を高め強化することである。彼が公にする野心においても、密かな策略においても、彼の目的は同じだった。それは、イギリスにおける最高位を得ることだった。

このようにレイモンドは権力欲に取りつかれた登場人物であるが、彼の目的は彼自身の感情が導く行動と相いれず、しばしば情熱から自らの野心を砕く結果に陥る。この点でメアリ・シェリーの *Valperga: or, the Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca* (1823) において感情を抑制し野望を手に入れる主人公カストルッチオ・カストラカーニと比較すると興味深い人物である。

レイモンドの感情が彼の野心の妨げとなる点は、女性との恋愛関係において繰り返す権力獲得をしくじる点で明らかである。レイモンドはその野心を満足させるべく退位した王の娘でエイドリアンの妹であるアイドリス (Idris) と結

婚し王権を得ようと画策する。しかし、エイドリアンらとの交流の中でヴァーニーの妹であるパーディタ (Perdita) を愛するようになり、アイドリスとの結婚と君主制の復活において王位に就く計画は断念する。君主となる野心を捨てたレイモンドはパーディタと結婚し、共和制の枠内での最高位となる護国卿の地位をつかむ。しかしその途端、エヴァドニと不倫関係を持ち結婚生活が崩壊する。彼は妻との不和に耐えられず護国卿の地位を投げ捨てて、再びトルコとの戦いでギリシアに加勢するために旅立つ。このような成り行きを語り手は以下のようにまとめている。

The selected passion of the soul of Raymond was ambition. Readiness of talent, a capacity of entering into, and leading the dispositions of men ; earnest desire of distinction were the awakeners and nurses of their ambition. But other ingredients mingled with these, and prevented him from becoming the calculating, determined character, which alone forms a successful hero. He was obstinate, but not firm ; benevolent in his first movements ; harsh and reckless when provoked. Above all, he was remorseless and unyielding in the pursuit of any object of desire, however lawless. Love of pleasure, and the softer sensibilities of our nature, made a prominent part of his character, conquering the conqueror ; holding him in at the moment of acquisition ; sweeping away ambition's web ; making him forget the toil of weeks, for the sake of one moment's indulgence of the new and actual object of his wishes. Obeying these impulses, he had become the husband of Perdita : egged on them, he found himself the lover of Evadne. He had now lost both. (115)

レイモンドの行動の根本原理のうちで特に卓越しているものは野心であった。臨機応変の才能、つまり人の中に入って行き彼らの気持ちをまとめることができる能力や、名声を得たいという熱望がその野心を目覚めさせ

てたのであった。しかしこれ以外の要素がこれらと混じり合い、彼を計算高く断固とした人物にするのを阻んでいるのだ。そのみが名声を得た英雄を生むものなのだというのに。彼は強情であったが堅実な人物ではなかった。初対面では好意的であったが、挑発されると粗野で思慮分別を失った。加えて、どれほど放埒な願いであっても、自分が欲望するものを何であれ追い求めることにおいては、執拗で譲らないところがあった。快樂を求める心と人間の持つ優しい感受性が彼の人となりの大きな部分を占めており、野心の求めるものを手に入れる寸前に彼を引き留め、野望の罨を払い去り、真新しく目の前に置かれた望ましい対象を一瞬味わうためだけに、何週間にもわたる骨折りを台無しにしてしまうところが、征服者となるべき人格を打ち負かしていた。そういった衝動に身を任せて彼はパーディタの夫となり、そのような衝動にそそのかされて彼はエヴァドニの愛人となった。今や彼は二人とも失ってしまったが。

上記の引用では、野心を持ちながら衝動に突き動かされてしまうことで、その達成を台無しにしてしまうレイモンドの姿が描かれている。衝動的で破滅的な人物像がうかがえる。

レイモンドはロマンスの要素によって自身が抱く征服者としての野心を碎かれる者である。引用最終部分に書かれているように、パーディタとエヴァドニを失った彼にとって、その野心を碎くロマンスの要素はすべて取りはらわれた。この時点で彼はギリシアへ向けて旅立つことを決意し、そこで今度こそ征服者となる。これがその決意を示すレイモンドの言葉である。“I am about to return to Greece, to become again a soldier, perhaps a conqueror.” (119 強調筆者) (私はギリシアへ戻るころだ。再び兵士、いやおそらくは征服者となるために。)彼の野望を阻害するロマンスを持ち込む女性が消えたことで、彼には野望しか残っていない。しかし、彼の野望には目的がなく、ただひたすらさらに大きな権力を求め続けるしかない運命なのである。そのような野望がレイモン

ドを導く先をエイドリアンはこのように述べている。“He is always successful, and bids fair, at the same time that he acquires high name and station for himself, to secure liberty, probably extended *empire*, to the Greeks.” (126 強調筆者) (彼はいつも成功するのだし、地位と名誉を得るとともに、ギリシアの人たちに自由を、おそらくは拡大された帝国をもたらすだろう)

征服者となり英雄視されるレイモンドの行為は、彼とともにギリシアでの戦いに参加したエイドリアンの回想により相対化される。

But let us not deceive ourselves. The Turks are men ; each fibre, each limb is as feeling as our own, and every spasm, be it mental or bodily, is as truly felt in a Turk's heart or brain, as in a Greek's ... They were men and women, the sufferers, before they were Mahometans, and when they rise turbanless from the grave, in what except their good or evil actions will they be the better or worse than we ? Two soldiers contended for a girl, whose rich dress and extreme beauty excited the brutal appetite of these wretches, who, perhaps good men among families, were changed by the fury of the moment into incarnated evils. An old man ... interposed to save her ; the battle axe of one of them clove his skull. I rushed to her defense, but rage made them blind and draf ; they did not distinguish my Christian garb or heed my words ... (126)

だけど、自分を欺くのはやめよう。トルコ人だって人間なんだ。一つ一つの神経、手足は我々のものと同じ感覚を持っているのだ。衝撃を受ければ、それが精神的なものであろうと肉体的なものであろうと、トルコ人の心や脳に間違いなく感じられているんだ、それはギリシア人の器官におけるのとまったく同じようにね。…彼らは回教徒である以前に男であり女であり苦しむ者なんだ。そして彼らがターバンなしで墓から蘇ったなら、彼

らの行為の善悪以外において我々より優れているとか劣っているとかをどうやって判断するんだい。二人の兵士がある少女を巡って争っていた。その少女の豪華な着物と素晴らしい美貌がこの二人の憐れな男の野卑な欲望を掻きたてたのだ。二人はおそらく家庭ではよい夫であったはずだが、一時の激情によって悪の化身へと変わってしまったのだ。一人の老人が少女を助けるために割って入ると、兵士のひとりの戦闘用斧が彼の頭蓋骨を真っ二つにかち割った。私は彼女を守るために駆け出したが、狂暴が兵士の目と耳をふさいでいた。私のキリスト教徒の衣服は二人の目に入らず、私の言葉を気に留めることもなかった。

このようにエイドリアンは、レイモンドが行うギリシアの領土奪回および拡大は、イスラム教徒側の視点から見れば残虐な行為である点を示し、レイモンドの英雄性を疑問視する。当時のギリシアは帝国ではなかったにもかかわらず、エイドリアンはレイモンドがこのような戦いを通してギリシア人に大きく拡大した「帝国」をもたらすかもしれないと述べている。この点において、小説中のギリシアの領土拡大をイギリス帝国主義の拡大を重ね合わせることができるのではないだろうか。イギリスは東インド会社を置きインド支配を拡大している時期であることから、イギリス帝国主義の拡大に関する疑念の暗示とも考えることができるだろう。

領土拡大を熱望するレイモンドは、もはや疫病におかされ死者の町となったコンスタンティノープルへ一人攻め入る。敵軍が疫病により全滅した状況で、疫病が蔓延する危険を冒してまで領地に攻め入る行為は無意味であり、彼の行動が明確な目的を持たず、ただ英雄的な行為を欲していることを示している。レイモンドの目的を喪失した領土拡大への情熱は、不安を呼び起こす怪物的な姿への変容として語り手に恐怖を持って認識されている。以下は語り手ヴァーニーの夢である。

I awoke from disturbed dreams. Methought I had been invited to Timon's last feast; I came with keen appetite, the covers were removed, the hot water sent up its unsatisfying steams, while I fled before the anger of the host, who assumed the form of Raymond; while to diseased fancy, the vessels hurled by him after me, were surcharged with fetid vapour, and my friend's shape, altered by a thousand distortions, expanded into a gigantic phantom, bearing on its brow the sign of pestilence. The growing shadow rose and rose, filling, and then seeming to endeavour to burst beyond, the adamant vault that bent over, sustaining and enclosing the world. (160)

私は心をかき乱す夢から目覚めた。思うに、私はタイモンの最後の食事に招かれていた。ひどく空腹の状態に到着し、料理のふたが開けられると熱湯からもうもうと蒸気が湧き上がった。その間私は、主人、それはレイモンドの姿をしていたが、の怒りから逃れようとし、病んだ空想の中で彼が投げつけた食器類は、悪臭を放つ蒸気が蔓延した中にいる私をめぐらしていた。私の友人の姿はひどく歪められ巨大な幻影へと膨れ上がり、その額には疫病の刻印があった。膨れ上がる影はどんどん高くなり、部屋を満たし、この世を支え取り囲んでいる強固なアーチ形天井を破壊しそれを越えて膨らんでいくようであった。

タイモンはシェイクスピア劇に出てくる登場人物で、裕福なところに歓待した者たちが、落ちぶれた自分を見捨てることに怒る人物である。この点で、落ちぶれていたころには誰にも相手にされなかったが、地位と名誉を得ることで人とのつながりを得たレイモンドと重ねることができるだろう。レイモンドはそのような世間の反応に気をよくして、あくなき権力欲に取りつかれたのだが、その欲は留まる所を知らず、もはや無意味なものとなったコンスタンティノープル陥落に執着し、その結果疫病の脅威を世界中へ拡大させる。もはや目的のな

レイモンドの行動に理性的な意味付けをすることができないという点で、彼の姿は実体を欠いた幻影、影であると認識されている。その姿が蒸気のように膨れ上がり世界を覆う天蓋をも突き破り拡大する点は、目的を欠いた欲望が暴走していることを語り手が見抜いていることを示しているのだろう。

レイモンドが持つ欲望と彼の行動に関する描写が示す否定的な側面は、メアリ・シェリーがイギリスの帝国拡大に関して懐疑的であったことを示しているのではないだろうか。ここで、レイモンドがギリシア人にもたらすであろうとエイドリアンが予見した“extended empire” (126) が何を示しているのかは曖昧である。レイモンド自身がナポレオンのように皇帝となり、ギリシアを支配するのであるか。イオニア諸島合衆国は当時イギリスの保護国となっていたのだから、レイモンドの活躍がイギリスの拡大する帝国の一部という地位をギリシアにもたらすのだと考えることもできかもしれない。そういった場合でも、エイドリアンがもたらすレイモンドの行動に対する懐疑的視点は、帝国主義政策に対する懐疑を示すことになる。

いずれの場合においても、帝国主義的な領土拡大はレイモンド個人のギリシア独立への熱狂という、物語の中では優れた英雄性として好ましい形でもたらされる一方で、それに対する批判はエイドリアンの間接的な批判や、ヴァーニーの夢、つまり意識下の認識として示されることで、ある程度抽象化されているといえよう。このような語りは、イギリスの政策を直接批判するような書き物と比べると、かなり控えめであるといえる。前章でも示した通り、今後シェリーが持つようになる保守的な姿勢を垣間見せているといえる。

4. お わ り に

『最後のひとり』においては、物語の後半に現れる疫病の持つ意味合いが大きく注目されることが多いが、本論においては、前半の政治闘争においても、メアリ・シェリーの思想の揺らぎが確認される点を示した。物語の主人公とも

いえる疫病が登場するのは物語の半ばあたりであり、それ以前の部分は物語を冗長にする不要な部分ともみなされがちであるが、そこにある政治性は本小説およびメアリ・シェリーの生涯における思想の変遷を考えるうえで、重要な手掛かりとなるものである。もちろん小説全体の意味を解釈することにおいて、政治的な観点だけを取り上げることは偏っていることは言うまでもないが、これまで十分に検討されてきたとは言えない物語の前半にみられる政治観を整理することには意義があったと考える。『最後のひとり』が示す政治性を踏まえたうえで、いかなる政治の在り方も意味を持たなくなる物語の後半の解釈を進め、物語全体を見渡すことを今後の課題としたい。

* 本論は 2014 年度松山大学特別研究助成の成果である。

参 考 文 献

- Brewer, William D. "Mary Shelley on the Therapeutic Value of Language." *PLL*30.4 (1994) : 387-406. Print.
- Conger, Syndy M. et al. *Iconoclastic Departures : Mary Shelley After Frankenstein*. London : Associated University Presses, 1997. Print.
- Fisch, Audrey A. "Plaguing Politics : AIDS, Deconstruction, and *The Last Man*." Fisch 267-286.
- Fisch, Audrey A. et. al. *The Other Mary Shelley : Beyond 'Frankenstein'*. Oxford : Oxford UP, 1993.
- Lokke, Kari E. "The Last Man." *The Cambridge Companion to Mary Shelley*. Ed. Esther Schor. Cambridge : Cambridge UP, 2003. 116-34. Print.
- Markman, Ellis. *The Politics of Sensibility : Race, Gender and Commerce in the Sentimental Novel*. Cambridge : Cambridge UP, 1996.
- Mellor, Anne K. *Mary Shelley : Her Life, Her Fiction, Her Monsters*. New York : Routledge, 1988. Print.
- Paley, Morton D. '*The Last Man*' : *Apocalypse Without Millennium*. Fisch. 107-123.
- Shelley, Mary. *The Journals of Mary Shelley 1814-1844*. Eds. Paula R. Feldman and Diana Scott-Kilvert. Baltimore and London : Johns Hopkins UP, 1987. Print.
- . *The Last Man*. 1826. *The Novels and Selected Works of Mary Shelley*. Vol. 4.

- Eds. Jane Blumberg and Nora Crook. London : Pickering, 1996. 8 vols. Print.
- . *Valperga : or, the Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca*. 1823. *The Novels and Selected Works of Mary Shelley*. Vol. 3. Ed. Nora Crook. London : Pickering, 1996. 8 vols. Print.
- Stafford, Fiona J. *The Last of the Race : The Growth of a Myth from Milton to Darwin*. Oxford : Clarendon P, 1994. Print.
- Sterrenburg, Lee. *The Last Man : Anatomy of Failed Revolution*. *Nineteenth-Century Fiction* 33. 3 (1978) : 324-47. Print.
- Wells, Lynn. "Triumph of Death : Reading and Narrative in Mary Shelley's *The Last Man*." *Conger* 212-234.
- 市川純. 『メアリ・シェリーの小説－男性英雄像の破壊、廃墟化、及び英雄に代わる女性像－』早稲田大学モノグラフ 46 早稲田大学出版 2011年. 出版物.
- エリクソン, キャロリー. 『イギリス摂政時代の肖像－ジョージ四世と激動の日々』古賀秀男訳 ミネルヴァ書房 2013年. 出版物.
- 佐々木真理. 「『最後の人間』におけるメアリー・シェリーの政治観－統治者と人間性の考察－」武蔵野大学文学部紀要 第10号 2009年 140-132. 出版物.
- シェリー, メアリ. 『最後のひとり』森道子他訳 英宝社 2007年. 出版物.